ＩＣＴ成長力懇談会　第８回議事要旨

１　日時　平成２０年６月３０日（月）15:30～16:30

２　場所　総務省８階　第１特別会議室

３　出席者　村上座長、岡村構成員、岸構成員、篠崎構成員、
徳田構成員、野原構成員、古川構成員
増田総務大臣、鈴木総務審議官、小笠原情報通信政策局長、寺崎総合通信基盤局長、
中田政策統括官、松井官房審議官、
鈴木総合政策課長、谷脇事業政策課長、今川総合政策課調査官、行政管理局長屋情報システム企画課長、自治行政局市橋自治政策課長

４　議事要旨

（１）　冒頭、村上座長からの挨拶の後、事務局より最終報告書（案）及び情報通信国際戦略局の発足について説明があった。その後、各構成員より最終報告書（案）について意見があった。主な内容は、以下のとおり。

【村上座長】

○　最終報告書（案）について事前に頂いた構成員からの意見については、産官学民、利用者サイド、供給者サイド等々、これだけバックグランドの違う構成員からいろいろな側面から意見を集め、ほとんどすべてを反映させることができている。

【古川構成員】

○　この最終報告書は以前よりもさらに良くなっている。一点、骨子（案）の９ページ、産業変革の具体事例の部分について、「効率性を高める」のところの「ｅからｕに」の事例で、化粧品に関する話、「臭いを含む五感通信により」と書いてあるが、「臭い」よりは「匂い」か「香り」としたほうが良いと思う。

（２）　最終報告書（案）が了承された。その後、最終報告書を受けた今後の展開等について、一言ずつ意見があった。主な内容は以下の通り。

【岡村構成員】

○　すばらしいものに仕上がった。プラットフォームなど通信・放送融合法制の問題があり、制度的な枠組が今から変わるという状況でもある。法制度の変革がＩＣＴを使った成長力の源泉になり得る形で進み、ＩＣＴの新たなステップへとつながっていくということを強く期待している。

【岸構成員】

○　最終報告書について、非の打ちどころがないと思う。誰が見ても、何が本質的に大事かが明確に分かるようになっている。ただ、この最終報告書が完成した後の取組が重要。

○　世界のＩＣＴやコンテンツ関係の取組を見ていると、残念ながら日本は欧米に比べて遅れている部分がかなりある。これから日本経済が悪化する中、特に地方の問題、地方の活性化を考えた場合、ＩＣＴの活用で貢献できる部分は大きく、グローバル市場での展開という観点から考えると、情報通信国際戦略局の役割は大きい。

○　ダビング１０が７月４日から実施されるが、今回の決定についてコンテンツ側の人たちは、不満や誤解をもっている。ＩＣＴの真の利活用を考えるとき、コンテンツは非常に重要な要素であるので、誤解を解くためにも、今後更に、ＩＣＴの利活用をより一層進めていかなければならないと思う。

【篠﨑構成員】

○　最終報告書は、包括的に整理されていて、非常にわかりやすいと思う。これからこの最終報告書に取り上げられている内容をどう具体化していくか、どう現実のものにしていくかが非常に重要。最終報告書を作成したところで、満足するのではなく、ここが出発点で具体的な各論をどう推進していくかが重要になる。フォーマルなルールとインフォーマルな業界慣行も含めて、具体的にどういう点に制度的問題があるのか、その細部に目くばせしながら一つ一つ解決していくことが重要。ただし、その際に細部にのみ目を奪われて、何のためにやっているかわからなるのを防ぐためにこの報告書の意義がある。ＩＣＴの技術変化は継続していくため、ビジョンを１回出して満足するのではなく、政策の見直しを不断に行わなければならない。

○　これまで通信や放送に関する様々な調整事は、国内での活動が中心だった。これからグローバルな視点が重要になってくる中で、国際戦略を専担する新しい局ができたというのはすばらしい。今後は始めから国際的な対応を視野に、ＩＣＴはグローバルな課題

に対するソリューションであるという認識が必要になる。環境問題、資源問題、医療、健康、高齢化など、人類が抱えるさまざまな課題を、課題先進国と言われる日本がＩＣＴを活用してどう対応していくか。「ｘＩＣＴ」はそういう意味で人類がこれから直面する課題に日本が先行的に取組み、それを海外に普及していくという姿勢を示すものである。また、成長力、生産性というと、コストなど分母を切り詰める発想に陥りがちだが、グローバルに展開していく積極的姿勢があれば分子が拡大していくと思う。

【野原構成員】

○　最終報告書は非常によいものに仕上がったと思う。特によいなと思っているところが４点ある。１点目は、「ＩＣＴ成長力懇談会」ということで、成長にどうつなげていけばよいかをしっかりと書き込めたということ。２点目は、成長と環境問題との両立を打ち出せたこと。３点目は、国際競争力の強化を非常に強く打ち出せたこと。４点目は、上記３点を明確に打ち出したにもかかわらず、地域や生活者の利活用も書き込み、バランスのとれた内容になっていること。ただ、いくらビジョンをうまく打ち出したところで世の中がすぐ変わるわけではなく、ここから具体的な施策をどう実現していくかが最も重要となる。

○　成長懇イレブンリレーコラムの中でも書いたが、「ＩＣＴ利活用２．０」について。今までのＩＣＴの利活用というのは十分ではなかったと懇談会でも何度か議論になったが、それでも利活用自体はかなりされていると思っている。しかしそれは「１．０」の世界に過ぎないのではないか。「２．０」へと進化するためには、従来の社会制度や手続の習慣を変えてでも新たなネット社会、ＩＣＴ社会でのやり方をつくっていかなければいけない。そういう意味で、既にある社会にＩＣＴを融合させるというスタンスではなくて、ＩＣＴの良さを活かすために、従来の社会制度や手続にまで踏み込んで変えていくことが重要だと思う。その一環でまず必要になってくるのが、いろいろなデータや情報の組織や業界を超えた共有を国がリーダーシップをとって早く実現すること。

【古川構成員】

○　本気で変えることの大事さを今、改めて感じているが、そうした気持ちがこの最終報告書の中にもよく出ていると思う。かつて、刀を差したままでは文明開化はできなかった。本当に刀をやめる、散切り頭にするという気持ちが必要なのだということを改めて感じた。

○　何度かこの懇談会でも申し上げたが、我が国の教育現場で学校の教員はまだＩＣＴを使いこなせていない。例えば、大雨が降って学校が休校になる場合、電話で連絡が回っ

てくる。メールでの連絡は利用されておらず、学校現場のＩＣＴ化が進んでいない。それは、佐賀県内の小学校、中学校、義務教育施設において、校内ＬＡＮの整備がまだまだ完全ではないし、市町村は、今、非常に財政状況が厳しいということもある。さらには、初等教育の前の段階からＩＣＴを活用した教育を進める必要があると感じている。

○　もう一つはものづくりについて、改めて日本製品の技術の高さに驚いている。軽くて丈夫なパソコンを作っているメーカーに違いは何かと尋ねたら、国産部品の使用比率が高く、その分だけ割高にはなっているが、強さはどこにも負けないと。それを支えているのは日本の中小企業が持っている衝撃吸収のラバーの技術で、これは日本製でしかできないとその人は力説していた。こうしたものづくりにおける我が国の優位性は、ぜひ、これからも保っていかなくてはいけない。そうしたことが、我が国技術をベースにした国際規格の採用促進などにも役に立つと思う。

○　情報通信国際戦略局については非常に期待している。どこの国へ行っても驚かないくらい技術力の高い、ノーサプライズの日本社会をぜひ実現していただきたい。

【徳田構成員】

○　「ｘＩＣＴ」のところで地域が変わる、産業が変わる、生活が「変わる」という部分について、「変わる」というメッセージを細かく緻密に記述されている点が良い。「×（掛ける）ＩＣＴ」というのは、なかなかよいひっかけの形になっているので、これがシンボルとなって、いろいろな分野に広がっていけばと期待している。

【村上座長】

○　本日欠席の麻倉構成員と森川構成員からは書面で意見が届いているので紹介させていただく。森川構成員からは、「本懇談会に出席した間は頭をフル回転させていた貴重な時間だった。懇談会でこのようにすばらしい報告書がまとまったことに感慨を覚えている。報告書の中で重要な点は、「変わる」という言葉だと思う。アメリカでも日本でもチェンジというのが大事だということだと思うが、ユビキタスも含めたネットワーク技術は、今まで以上にこれからの産業構造、経済構造、社会構造に影響を与えていくことになる。世の中がどう変わるかを予測することは極めて難しい作業だが、変わることは事実。ドラッカーは、蒸気機関が鉄道の登場を促し、鉄道の登場がめぐりめぐって郵便、銀行、新聞などの登場につながったと喝破しているが、ＩＣＴ技術も長い年月をかけて新しい産業と社会制度の確立に寄与していくことになる。変わりつつある時代の中で研究開発を進めている我々も、このような視点で、産業、経済、社会が変わるプロセスに寄与していければと思う。」という意見が届いている。また、麻倉構成員からは、

「この指針は今後の日本の成長戦略策定の重要な道しるべである。産業、地域、個人のＩＣＴによるエンパワーメントを厚く期待したい」という意見が届いている。

○　最後に私からも一言述べさせていただく。この懇談会が始まったときに大臣から挨拶があったが、その中で「ＩＣＴの王道を書いてほしい」と仰っていた。経済成長についても王道を見つけなければいけないが、ＩＣＴがその鍵を握っていることは間違いない。８回にわたる懇談会の中、それがずっと頭を離れなかったが、今回、最終的にまとまった「ｘＩＣＴ」というビジョンは、まさにＩＣＴがどう成長に貢献できるのかということを産業と地域という２つの側面で、非常にわかりやすく示すことができたのではないかと強く思う。「ｘＩＣＴ」の前にある主体、それは医療、自治体、自動車産業、エレクトロニクス産業、あるいは生活者であったりするが、その主体がＩＣＴを活用していくという意味でどんな考え方をとればいいのか、どういう方法論をとればよいのかというとまり木になるものを示せたと思う。

○　１９９０年代の産業とＩＣＴの関係は、産業がＩＣＴに対して情熱を持って、何とか活用しよう、取り組もうというスタンスがあったと思う。それは逆に、オールドインダストリーの場合にはＩＣＴの側から責められたということでもあるが、非常に強い意思、強い情熱を持って取り組んでいた。しかし現状ではシステムと経営との距離は近づいているが、ＩＣＴと経営との距離は近づいてきていない、むしろ遠のいているかもしれない。

○　「ｅからｕへ」という今回のメッセージ、「ｕの世界」というのは全くフロンティアである。その大きなフロンティアが広がっている領域で、日本の産業界が「ｘＩＣＴ」をつくれれば、それは確実に次の流れをつくり出し、次のイニシアティブをとるトリガーになる。報告書は１００ページ近くあるが、非常に読みやすい内容になっているので、ぜひ、これを経営者の皆さんにも読んでいただければと思う。

（３）　村上座長より「最終報告書」が増田総務大臣に手交された。続いて、増田総務大臣より閉会に際して挨拶があった。

（４）　座長より、「ＩＣＴ成長力懇談会」閉会の挨拶があり、閉会。

以　上